

病理検査室の窓辺から

誤字

斉藤 隆三

PCL 東京 病理・細胞診センター

病理診断医は標本をみて診断し、その所見から病理診断報告書を作成するという仕事をしている。報告書の作成はパソコンを使っているために、細心の注意を払っていても漢字の変換ミスなど思わぬ間違いをおこすこともないわけではない。そのためにできあがった報告書を事務の方々が一字一句点検し、誤字や文章の誤りなどがどうかをチェックしている。

病理組織検査依頼書をみていると、ときどき誤字があるのに気づく。主に漢字の誤りである。発音は同じでも漢字は異なるもの、似たような漢字との間違いなどで、丘疹、皮膚収容、単褐色、脾粒種、肉下腫、肉芽周、腋下、繭毛、介癬、紛瘤、鼻唇後部、霰粉腫など見直せばすぐに間違いに気づくことであろう。

一方、疾患名などを誤ったまま覚えてしまっているための間違いもある。脂肪性角化症、皮脂性角化症、類天疱瘡など、この場合は本人は過ちに気づくことはない。

さらに文章の些細なミスを見過ごしていることがある。デタラメな文章でも気づかずすらすらと読めてしまうのは、タイポグリセミア (typoglycemia) 現象といわれているもので、脳が正しい単語として補正してしまう錯覚の1つである。これを避けるためにはほかの人にチェックしてもらうか、時間を空けてもう一度読み直すことが必要であろう。依頼書のようなものでは、多少の誤字や文章のミスはその内容から判断できれば許される程度のものであるが、公的な文書では注意が必要である。

繰り返しになるがパソコンの変換ミスなど単純なミスによるものであれば、点検することにより誤りはすぐに訂正されることであろうが、誤認識によるものは他人から指摘されるまで、気づかずに過ごしてしまうことになる。注意したいものである。